設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 5年 8月12日
(123号)

中之島ニュース

［事務局］
〒567-0861
茨木市東奈良2-7-10
人間学塾・中之島
古田修平

「小さなあゆみ　大きな喜び」

福永 道子　先生

7月度特別講義より

■命懸けで腰骨を立てる

私は高校卒業後電電公社に就職したのですが、教師への夢を持ち、通信講座で幼稚園教諭の資格を得て臨時の幼稚園の先生に採用されました。さらなる夢を持ち、その後も勉強を続けて、小学校教諭の資格を得ます。晴れて小学校教員の採用試験の合格を手にしたときに、お世話になった神戸市教育委員会の岸野先生より森信三先生とのご縁を繋いでいただいたのでした。この日を境に私の運命は大きく転換いたします。当時森先生は七六歳、海星女子大で教鞭をとられていました。私は豊中市にあるマンモス校の小学二年の担任でした。そのクラスは六人のやんちゃな子どもたちにかき回されて無茶苦茶な状態でした。私は教えて頂いている立腰を武器だとばかり、「腰骨を立てる」と前面に打ち出しクラス経営をしました。ところがそれだけではクラスは収まらず、とうとうやんちゃな子どもたちが行方不明になるという事件が起きます。学校中の先生方と探し、ようやく無事に見つかり安堵したものの、なんと子どもたちは高速道路を歩いていたのです。あわや大事故になるところでした。そのとき先輩の先生が「あなたは朝から晩まで腰骨をたてよ、と子どもたちに言っているが、自分は走り回っているではないか。まず自分自身が落ち着くことです」と仰いました。その日以来、私は命懸けで腰骨を立てるようになりました。それから十日ほど経ったころ、腰骨を立て静かに目を開けると、どの子も真剣に腰骨を立ててくれていました。

■徳永康起先生との交流

森先生から教わり、学級経営で二つ目にしたことは、はがきを書くということです。クラスの子どもたちに月に三通は届くようにせっせとはがきを書きました。そこには良いことばかり書くのです。夜の食事のときにそのはがきが家庭の団欒の中心になるはずだからです。子どもも家族から褒められて、嬉しくて、きっと家族が大好きになると思うのです。

そして三つ目の森先生の教えは、「成形の功徳」です。学級通信を毎週発行していました。一年の終りにそれを一冊にまとめ、表紙をつけて子どもたちに一冊ずつ渡していました。三、四十年経っても教え子たちは本棚にそれを立ててくれているそうです。

森先生にもしょっちゅうはがきを書いていましたが、熊本の徳永康起先生とは、一日一信を二年間しました。徳永先生は子どもたち向けにも言葉をくださいました。「…どうか賢い子になってください。賢いことは頭が良いことだけではなくて、心がきれいで少しでも人の役に立つ人だと思っています。心も頭も磨きましょう。さようなら」こんなお便りをたくさんいただきました。

森先生も、たくさんはがきをいただかれ、そのお返事を書かれるなかで、それでも子どもたちにお便りをくださいました。子どもたちへは大きい紙に書かれるので、ずっと掲示板に貼っていました。

■大きくならずとも深くはなれる

その後退職し、次なる夢は「あゆみ保育園」の設立でした。昭和五八年一月、私は主人に「庭に保育園を作ってください」とお願いすると「よし作ってやる」と。「あゆみ」の名前は森先生が付けてくださいました。園児二名職員三名であゆみ保育園はスタートしました。私が保育園に立てた二つの柱は、「地域にお返しをしていく」「保育を教育として取り組む」ということです。教育として取り組むためには記録が大切ですから、園長便り、園便り、生活記録簿、デイリーメッセージなど毎日記録をして子どもに持たせました。教育の中心は「腰骨を立てる」としつけの三原則である「はいの返事」「あいさつ」「履物をそろえる」。さらに森先生から「ありがとう、すみません、ごめんなさいの言える子に」が付け加えられました。この七つのことを自分自身の血液・細胞に溶かしこむイメージを持ち、子どもたちが私と生活したらこれらはみな伝わる、そう思って、真剣にこの三〇年間生活してまいりました。

あゆみ保育園を初めて二年ほどのころ、森先生から「東の仁愛に（なれ）」とお便りをいただいた。福岡の仁愛保育園のことです。とんでもないこと、仁愛とは規模も教育力も違います。しかし、あゆみ保育園は大きくはなれないが、深くはなれる。地中深く根を張って、「あゆみ教育」を深めてゆこうとそのときあらためて誓いました。そうしてやってきたあゆみ保育園は、三〇年で閉園いたしました。小さくても充実させることの喜びに気づかせていただくことができました。

森先生からいただくお便りにはいつも主人のことが書いてありました。

「あなたはご主人によって助けられ、教えられています。これこそ、現代の女性にとっての最大の幸福といえましょう。そしてそれは、あなたの長所を最高に生かし、しかもそれを喜びとしておられるからです。数え九四歳森信三」

森先生からは本当にたくさんのことを学ばせていただきました。平成四年一一月二一日、先生は九六歳の生涯を終えられました。眠るがごとくの大往生であったとのことです。

（抄録　中川千都子）

グループ討議　七月

◆　福永道子　先生　７月８日（土）

Aグループ

・命がけで腰骨を立てたら、子どもたちが変わった。まずは静かに座りなさい。

・ご主人の無言の支え。

・小さくても充実させる。大きくなれないけれど深くはなれる。

Bグループ

・比べることの虚しさ。

・ハガキ道の深さを感じた。

・清風は百鳥を育む。

Cグループ

・しつけの三原則。

挨拶、返事、後始末

・腰骨を立てる。

・大きくなれない。

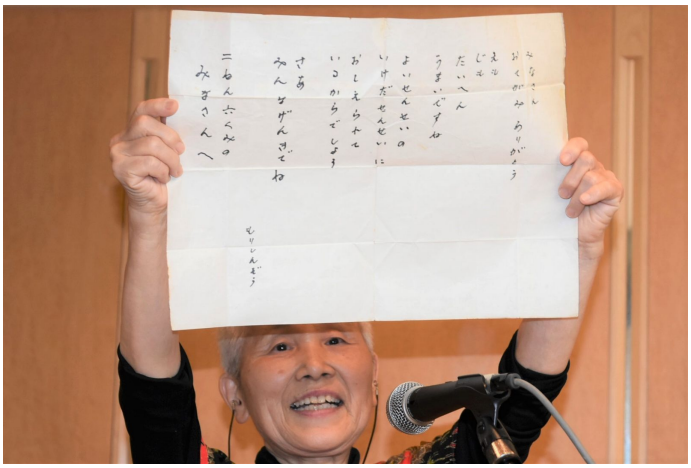
でも、深めることはできる。

Dグループ（リモート）

・森信三先生の教えをしっかり、学校や保育園で実践されてきたことに感動。

・徳永康起先生の二万三千通のハガキを三千通にまとめられた寺田一清先生のすごさに感動。

・子どもたちを離れて見ることの大切さを感じた。「親」の漢字「木の上から　立って見る」



懇親会にも出席して頂けました！

寺田一清先生メッセージ

第一期卒塾文集より

昨年九月、「人間学塾・中之島」と銘打って大阪大学中之島センターにて、新発足以来、はや一年を迎えようとしていることは、時の流れの速さを感じておると共に、塾生並びに聴講生の人材参加の豊富さを思うにつけても、感慨のひとしおなる

これもひとえに、十四年に渡る「天分塾」の活動あればこそであり、天分塾の永年に渡る基盤形成のご努力に対し、敬意を保持し続けることも忘れてはならぬ、要件の一つではなかろうかと思います。その上に立って、次に思いますことは、たえざる工夫参学であります。あらゆる事業経営において、言えることであります。

わたくし自身に対し最も言うべきことでありますが、微善と細心の工夫であります。鍵山秀三郎先生から常に教えられるごとく「凡事徹底」と、「微差大差」であります。先日の研修日において、痛感しましたことは、教室形式からグループ討議に移る配置転換は、実にお見事な協力と迅速さに驚きの他ありません。ところでいま一つ、少し気になりますことは、机に椅子をおめるとき、また出すとき、なるべく音を出さないように―という一事です。わたくしは、わが毎月の岸城読書会でも、この一事の徹底をお願いしております。

これは一昨年、全国高等学校野球大会で優勝に導かれた、沖縄興南高等学校の我喜屋監督が各選手に強調せられたことで、椅子の出し入れに音を出さないという一事のしつけでした。

つぎに思いのまま申し上げますれば、講師選択へのたえざる研鑽工夫であります。最近よくお届け頂くのは、週二回みやざき中央新聞でありますが、それは主として各地講演での講師著述の要旨登場です。わたくし自身、去る一月二七日鹿児島での「森信三先生に学ぶセミナー」での拙講の要点をみやざき中央新聞にとりあげ頂きまして以来、お送り頂き着目するようになりまして、感じますことは、いろんな講師がおられ、新人発見につき、大いなる啓発を受けたことであります。

以上三点につき、中之島塾、第一期を終えるに当たり感慨のに一端を述べたいと思いました。

なお、M(ミッション)V(ビジョン)P(パッション)と教えられて以来、使命感・目標設定そして情熱を持って残された余生、いや残生―(これもいけませんね。)恵まれた余生、いや賜生を、いかに生くべきか―が幸齢者の私自身の大問題です。目標の一つとして、愛知の西三河一〇〇キロウォークへ参加の意思表示をほのめかしたところ、情報化の時代ゆえ、このことが伝わり、応援隊が出来、揃いのTシャツまで出来上がり、ドエライことになりました。私も志力(死力)を尽くし、制限時間の一〇分前に、泣きながらゴールに辿りつきたいとも、念願しています。毎日二キロほどの歩行訓練中では、ゴール入りはおぼつかないことでしょうが、これも全くしないより、少しは徒歩訓練になっていることでしょう。

私どもが毎月の研修日に朗唱する三つの誓いを、心にとめ、「一つでいい　一つがいい　小さな一つをやりつづけよう」と改めて誓うばかりであります。

私も今秋目指す一〇〇キロウォークの目標に向け、小さな努力の積み重ねを実行したいと、改めて念じておる次第です。

そして、私の唱句、

「サムハラ　サムハラ　あらはしやな」

と口唱しながら、制限時間三〇時間ギリギリにゴールすることが出来たら、万々歳です。

寺田一清先生に導かれて　近藤宏枝

『女人開眼抄』と『日本婦道記』

平成五年の春に寺田一清先生とお出会いし、まず一番にお勧め頂いた書籍が『森信三先生不尽叢書全五冊』でした。そしてその中の一冊『女人開眼抄』は、あれから三十年片時も離れることなく、私の人生と共にあると言っても過言ではない指針となったのです。森先生はこの本の末尾に「全日本女性への願い」として「女性として生まれてきたことの幸せを、人生の晩年に至って、心から喜べるような女性になっていただけたら」という慈愛の言葉で括られています。更には、二十一世紀を迎える日本民族の前途は、全日本女性の日々の歩みと慎みの如何にかかっていると託されているのです。その思いは寺田一清先生が引き継ぎ、私は寺田先生のたっての願いに導かれ、平成七年に女性だけの読書会「なのはな読書会」を発足しました。もちろんテキストは『女人開眼抄』です。当時は私もまだまだ未熟で、参加者の結婚や出産を機に中断する事となり、いまもって寺田先生の思いを果せずにいる事が心残りとなっています。

また山本周五郎作に『日本婦道記』という名著があります。これは十一篇からなる短編小説で、強い意志を持った日本女性が男性と共に生き抜く物語で、どんな逆境にも諦めず自分の分を全うする女性のお話です。私は平成十八年の春に寺田先生からこの本の「百回読破」の厳命を頂きながらこれまた、果たせないまま今に至っているのです。さてそれは誰も知られざる私事ですが、先ごろ嬉しいお誘いが塾生の野依佐千子さんからありました。

それは『女人開眼抄』をテキストとした読書会を発足したいということでした。更には読書会の命名を任せて下さり『日本婦道記』の一篇の題名「不断草」を提案致しました。お陰で少しは寺田先生に、良い報告が出来るかと勝手に胸を撫でおろしている次第です。

《人間学塾・中之島》次月日程

第十二期入塾式

◆日時
９月９日（土）13時～

◆場所
大阪大学中之島センター６階　ＥＦ

◆内容
入塾式・各自メッセージ

写真は第11期入塾式の様子です。

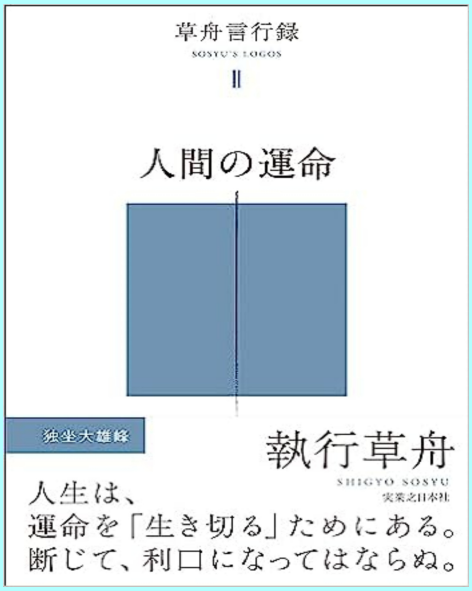
中川代表から緊急告知

「来期ご登壇くださる執行草舟先生の新刊『草舟言行録Ⅱ　人間の運命』（実業之日本社）が７月下旬に発売となりました。

この本の第４講は２０１９年10月に開催された当塾でのご講演内容が収められており、当日の会場の熱気が伝わってきます。

また本書281頁には「人間学塾・中之島は人間教育では最も名高い塾の一つなので、そこに招かれたことを私は大いに誇りにしているのだ。」と記述してくださっており、光栄なことです。

塾生の皆さんの印象についても触れておられるので、　ぜひご自身で本書にてお確かめくださいね！」



お願い

①中之島ニュースは塾生・登録塾生の方用に作成しております。
事務局・編集部に無断で転載や特にコピーなどを配布することは、ご遠慮ください。
よろしくお願いします。
②編集部アドレスは下記のとおりです。
事務局とは異なります！
感想文・文集・投稿等はこちらに↓お願いしまいす！
2012nakanoshima@gmail.com

編集後記

早いもので、いよいよ第十一期も終了。ご卒塾おめでとうございます。

七月の福永道子先生。命がけでの「立腰」あふれる笑顔が本当に素敵なお話でした。

さて、今月号ですが、卒塾文集のデータを編集中に、第一期の文集で、寺田先生の原稿を発見。今や直接、お話を頂くことができませんが、せめて文章だけでも皆様へと思い、引用させて頂きました。

「Ｍ(ミッション)Ｖ(ビジョン)Ｐ（パッション）」「恵まれた余生、いや賜生を、いかに生くべきか―が幸齢者の私自身の大問題」心にしみます。そして、当時、なんと愛知の西三河一〇〇キロウォークへ参加されたのです。残念ながら、途中で断念されましたが…十一期の最後にあたり寺田先生の熱い思いとともに、歩んで行こうではありませんか！。